第24回日本ジオパークネットワーク委員会議事録

日時：2015年9月4日　13：00－17：00
場所：永田町合同庁舎1階第一共用会議室

出席者：

＜委員長＞

尾池和夫	京都造形芸術大学長	（日本地震学会）

＜副委員長＞

中田節也	東京大学 地震研究所教授	（日本火山学会）

＜委員＞五十音順

阿部宗広	一般財団法人自然公園財団専務理事	（関係団体）
大野希一	島原半島ジオパーク事務局	（日本火山学会）
菊地俊夫	首都大学東京都市環境科学研究科教授	（日本地理学会）
佃　栄吉	産業技術総合研究所理事・地質調査総合センター代表	（日本地質学会）
中川和之	時事通信社解説委員	（日本地震学会）
成田　賢	全国地質調査業協会連合会会長	（関係団体）
橋詰　潤	明治大学研究・知財戦略機構特任講師	（日本第四紀学会）
平田大二	神奈川県立生命の星・地球博物館館長	（日本地質学会）
宮原育子	宮城大学事業構想学部教授	（日本地理学会）
目代邦康	公益財団法人自然保護助成基金主任研究員	（日本第四紀学会）

＜顧問＞五十音順

伊藤和明	防災情報機構特定非営利活動法人会長
町田　洋	東京都立大学名誉教授
渡辺真人	APGN諮問委員

＜関係省庁（オブザーバー）＞五十音順

今村翔太	国土交通省水管理・国土保全局砂防部砂防計画課地震・火山砂防室 火山対策係長
榎本　弘	気象庁地震火山部管理課地震津波防災対策室　調査官
大岡秀哉	観光庁観光資源課ニューツーリズム推進官
鹿嶋　誠	経済産業省産業技術環境局知的基盤整備推進室
柴田伊廣	文部科学省文化庁文化財部 記念物課文部科学技官
曽根　進	内閣府地方創生推進室　内閣官房産業遺産の世界遺産登録推進室参事官補佐
長谷川安秀	気象庁地震火山部火山課火山防災情報長性室　調査官

宮本利邦　　環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室
山本　豊　　環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室
若杉友紀　　外務省大臣官房国際文化協力室外務事務官

＜事務局＞

齋藤清一　　日本ジオパークネットワーク事務局長
木村彰太郎　　日本ジオパークネットワーク事務局員
中山由美子　　日本ジオパークネットワーク事務局員
内藤朋子　　日本ジオパークネットワーク事務局員
神谷方子　　日本ジオパークネットワーク事務局員

委員長あいさつ：現地審査はお疲れさまでした。議事録は会議中にご覧いただき、何かあればご指摘いただくということで、特になければそのままということにしたい。
世界ジオパーク推薦申請の白山手取川、日本ジオパークに申請している地域の解説をお願いする。

＜白山手取川について＞
委員：8 月 10-12 日に行った。総評的なこと。水の旅、石の旅というテーマで源流から河口までの 72 キロの手取川において侵食・運搬・堆積、が一連の系としてコンパクトに理解できる地域。白山山地の激しい隆起と侵食が同時に進行している変動が背景となっている。このような背景は、日本列島では常願寺川と同等の高い堆砂速度として表れている。それに加え、多雪地域のため侵食、堆積、運搬の現象をさらに豊かなものにしているのが特徴でありユニーク。手取川の脊椎動物化石が世界的にも有名。この化石については日本の地質時代を推定した最初の論文となっている。焼畑、農業用水、湧水を利用したことに特徴があり、それをうまくツーリズムに結び付けていて、ガイドによって語られるストーリーは、くらしと大地の環境としてうまく説明できており、地域住民の参加も認められる。特に断層崖の獅子吼高原は、蛇行と日本海に広がる扇状地の眺望、断層を利用したパラグライダーなど、訪問者を引き付けるものがある。一方、懸念する点は、世界的な特異性、価値があるということを証明するデータ、学術論文がないこと。ユネスコになろうとしているジオパークが国際的に科学的重要性として応えているところがない。表面な部分はツーリズムが用意されておりみどころが多いが、真髄について少し物足りないものを感じる。世界的に有名な脊椎化石動物群と隆起侵食との絡みの説明が足りない。さらに日本ジオパークとしても可視化 visibility については懸念が残る。市ノ瀬ビジターセンター（主管：環境省）、白山砂防科学館（主管：国交省）、白山ろく民族資料館（石川県）、千代女の里俳句館（白山市）等、それぞれの施設において、白山ジオパークとしての展示が明確でない。ジオパークの人として説明されているのでなく、組織の代表として説明している。ガイドは養成講座あるが、認定制度ができていない。ジオパーク解説板はあるのだが、どこに行って情報を得ればいいかという情報提供がない。メイン拠点がない。道の駅を整備しているので、そこが将来の拠点になると思うが。マップや詳細情報を得られる場所がまだない。よって、世界審査としてはまだ不十分。課題は残しつつも日本の再審査は問題ないだろう。

前回の世界審査で出された課題については、テーマ、石の旅を加えてストーリー性についての改善がみられる。エリアについては、手取川流域の川北町がエリアに入っていないのだが、ジオツアーには入れており、ストーリーを示すうえで運営上は問題ない。川北町の霞堤をガイド対象としており、町への呼びかけも積極的に行っている。今後の展開に期待できる。解説板は英語も加わって、改善している。関連施設についてはまだ不十分。ジオツアー商品についても課題があったが、ジオパークツアーが実施されてきているということで改善されている。

世界審査にクリアするためには、世界的価値づけ、裏付けが欲しい。砂防事業関係の施設をジオサイトとしているが、ジオサイトというよりは砂防を意識した文化サイトとして扱うのが好ましいのではないか。バックグラウンドになる地質の背景をきちんと説明することが重要。エコパークとの関連については白山を中心にした生態系の保全を中心にしているしジオパークは水の旅、石の旅で両者は補強しあっていい関係にある。両者の運営母体も一本化している。すぐれている点としては以下がある。専門員が地学、地理、考古学の各 1 名計 3 名が配置されている。市民活動のなかでは千代女の市民の俳句活動が活発に行われている。地元の麹等、湧水を利用した産業がジオツアーに含まれている。一方、防災関係では学習拠点はあるが、白山の火山活動等山の情報コーナーがない。警戒レベル導入も始まったのでこれに対応した情報発信の必要がある。

委員：国、県、市の施設をいくつか見学したが、もっと有機的につなげることができれば、ジオストーリーを伝えることができるのではないか。世界を目指すという地元の意識が明確でない。

委員長：これから議論していただくわけだが、報告によると世界は見送り、再認定はよいということだが、いかがか。

委員：2 年前の時はまだまだだった。ご指摘のあった部分は 2 年前もあったこと。GGN をなぜめざすかということもさっぱり分かっていない状況であった。それが今回、水の旅、石の旅は若干変えてくれたが、この 2 年間で事務局がどう変わったか、教えてほしい。

委員：市長のヒアリングが詳細版にあるが、ここのユニークさを世界に情報発信したいということ。

委員長：なぜ世界を目指すのかを説明できないと評価は難しい。

委員：協議会事務局は熱心だが、協議会全体として JGN と GGN の違いをどれだけ意識されているのか。特に、地元、ガイドの方々はどうかという質問をしたところ、協議会のなかでも議論が煮詰まってなかった。

委員長：最近、上流のほうで土砂崩れがあり国が科学物質で固定しようとしていたが国との関係はどうか。

委員：表向きは連携していると思うが、それぞれの人がジオパークとしてどうふるまうかの意識はまだのように思う。土砂流失のきれいな水と濁った水が交わるところがあるのだが、そこを地質をからめてきちんと説明すればよいが、肝心の地質の説明がない。ダムができたからきれいなのだという程度の説明。ジオパークの中の水の体系まで踏み込む必要がある。

委員長：清流と濁流が交るよい写真がとれるところだがその値打ちを少し理解していない印象がある。

委員：2 年前も環境省、国交省がでてきて拠点施設にしたいということだったが、連携がすすん

でいるのか報告書をみてもよくわからない。2年で今回本当に地元として準備が整ったと思っているとしたらまだ十分な認識がないということ。体裁を整えただけなのか、地元としては足りていないと思っているのか。
委員：足りていないとは思っていない。自分たちは宿題をこなした、と認識しているが指摘したことにはあまりこたえられないという状況。
委員：世界をめざす宿題をだしたが、もっと明確に書く必要があったのかもしれない。
委員長：いや、結構明確に書いてあった。
委員：宿題にはちゃんとこたえているが、世界はどうあるべきかを理解していないから、どこまでいけば世界にいけるレベルなのかの判断ができていない。
委員：学術的な裏付けのなさが指摘されているが、手取川の海岸工学の研究や化石などいくつかペーパーはあるが、そこで語ろうとしている内容の裏付けがない中で、研究はそこそこやっている人たちのつながりをもちながらジオパークの価値を高めるということはあったのか。
委員：ジオパークを意識していない部分はあるが、かなり連携はとれている。ただ、どう世界的にユニークかの説明が欠けている。
顧問：エコパークは世界なのだから、世界というのならなぜそれを使わないのかという議論があったようだが。
委員：エコパークの活動はまだあまりやられていない。エコパークを盛り上げていきたいとは思っているが。
委員長：再認定は問題ないということでよろしいですね。世界は見送りとしても今後どうしたらよいか議論が必要。
委員：国交省とは協力的にやっている。看板を作ってもらったり予算を確保してもらうなど、他にはない連携。その先の推進協議会が何をしたいかをふまえた上での連携がない。
委員長：先ほど言った、土砂崩れを化学物質で固めようとすることをしている国と、ジオパークとしての意味を本当にわかっての連携なのかどうか。
委員：協議会がそれほどしっかりしていない。事務局は一生懸命なのだが、協議会が消極的。協議会が何のための世界なのか、何を訴えたいかの体制づくりが必要との提案をした。
委員長：穀倉地帯には泥の河が重要なのに。
委員：いかに国際的にインパクトを与えられるか。
委員長：島集落のことを世界に紹介すべきと思っているのだが、ジオパークの中でほとんどでてこない。
委員：世界ジオパークになるためには、各地域の個性は別として、海外との連携、ガイド制度などが最低限達成すべきレベルにあるか確認したうえで動くべきであり、それを本人達がわからないで手をあげているとしたら不幸なこと。
委員長：同感だ。世界ジオパークになったら世界遺産並みにもっていく運動をしなくてはいけないのだが、それはかなり理解できていないとできない。ということで見送りでいいと思う。
委員：市長、協議会長は GGN の地域を見に行ったのか。行っていないのでは。せっかく隣に糸魚川世界ジオパークというのがあるので現場をきちんとみたほうが。
委員長：日本の世界ジオパークをみていない。
委員：市長は就任したばかりなので仕方ないかもしれないが。事務局として足りないこともわ

かっていてできないとすればどのように指摘していけばいいか。
委員：地質的な背景がGPの基礎であるということを理解してもらうのが重要。なにが世界的にユニークかと聞いてデータも出してもらったが、あまりユニークなものでもない。特に世界審査の時、世界的な価値があると言ってくれるか疑問。化石群をだせばそれなりに評価はされる。
委員：化石群と水の旅石の旅で、ストーリーを組める可能性はあると思うが、それが地元に十分理解できていないということか。
委員：白山は手取層群の上にのっている山。その途中にある濃飛流紋岩や岩稲層群とかグリーンタフが何故白山の下に存在しないのかなどの説明やストーリーもない。泥の濁りは地質を反映した話であるのにきちんと説明できていない。さらに重要なのは飛騨片麻岩という日本の地質構造のなかでバックボーンとなる非常に重要なものについては全く説明がない。それらをもっと活用していたら、世界をめざせるのではないか。
委員長：地形ができたいきさつと日本海に暖流が流れ込んでくるという歴史、世界的な豪雪地帯、水の旅等をもう少し整理してくれたら本当の価値を守るために有用だと思う。結論として、GGNへの申請は見送りということでよろしいか。
委員：評価として、資源としてはたくさんいいものを持っている。化石についてはいろいろ論文がでている。古脊椎動物研究者の活動をもっと評価して、連携すればもっとPRできるのではないか。講演会やシンポジウムなどについて協力をあおぐことをすればもっと可能性があるのでは。
委員長：古民家の研究もされているし、歴史もある。いろんな面で研究がすすめばよい。
顧問：白山の噴火警戒レベルは１だが、御嶽山も１であれだけの噴火をおこした。火山防災について何かこころがけているところはないか。
委員：青木さんがいろいろな講演をしているが、われわれが訪問した際は火山防災に関するものはなかった。土砂災害はあるが、それ以外の火山災害に関する情報はない。ただ気象庁の人が観測点があるという解説はしてくれた。
委員長：行政も意識していて悩んでいる。認識はあるが、市民に見せることがない。
委員：白山の火山防災協議会にジオパークが組織としては参加していないが、ジオパークを所管している部署が協議会に参加して、議論には加わっているとは聞いていて、ジオパークと火山防災協議会の関係はある方だと認識している。

＜栗駒山麓について＞
委員： JRの栗駒高原駅に事務局があり新幹線を降りるとインフォメーションセンターがある。ジオパーク構想について。栗駒山は3県にまたがる。宮城県だけでなく、内陸部にあり、宮城県の北西部に位置する。栗駒山から侵食された川、三迫川というのがあり、下流に段丘があり、肥沃な土地で農業がおこなわれている。江戸時代に開発がすすんだ。一番高いところが海抜1626メートル。なだらかな山で、低いところは海抜2メートル。伊豆沼に蓮が咲き、すばらしい景観だった。水深6メートル。平成20年に岩手、宮城内陸地震、平成23年の東日本と２つの大きな震災を経験し、地滑りが起こった。災害をうけつつ地滑り地形、景観を観光資源にしようと、防災、学術研究、観光等幅広くやっている。トップである市長のリーダーシップで行ってきた。防災についても意識が高く、しっかりやっている。ジオサイトの保全について。荒砥沢

の地滑り地域、国内最大級の規模の災害であったところの保存を、途上ではあるが、行っている。１００のジオポイントを設定し、ある程度できあがってはいるが、看板をふくめ、規約の中に、保全をどうするかという記述がないので、明確な記述をお願いした。教育活動については、防災教育部会が内容も充実し継続している。現地で新たな若い研究者の育成をお願いしたところ、すぐに計画を出していただいて予算を助成制度としてのせると報告をうけた。管理体制は、平成 20 年に災害をうけてその後、協議会をどうみせていくかということから始め、熟成してきた。ジオパーク推進室は現在 7 名体制。駅のインフォメーションにいる。要請した点は、全体構想をもう少し明確にし、5 年程度のロードマップ、アクションプランを共有してほしいということ。すぐに対応してくれている。運営体制は問題ない。ガイドについても平成 24 年から養成講座を始め、今年で 4 年目になる。33 名が登録。ガイドはそれほど上手ではないが、山岳ガイドは上手。紅葉のメッカなのでガイドでうまい人はいた。国際対応も少しずつ進んでいる。防災対応は、地滑り地をどう見せるか、ルート設定も途中で、安全性を含めることが今後の課題。結論として、平成 22 年から準備をしてきて、ガイドの養成、ジオサイトの選定、事務局体制、防災の取り組み等、しっかりやってきた。文化的なことでは、長屋門という民家の門作りがあるが、裕福な印象の門と長屋が一緒になって家内工業的なことをやっておりジオパークとして見せることができる。体制は十分ではないが相当の水準が確保されているので認定していいのではないか。

委員：エリアの問題。栗駒山は３県にまたがるので、宮城県だけで栗駒を使うのはどうかと言ったところ、秋田県は大日岳、岩手県は酢川岳と、それぞれ呼び名が異なるとのこと。栗駒というのは宮城県だけ。学術的には栗駒山なので、将来的には湯沢市と一緒に栗駒全体として構想しており、また、一関市にも呼びかけている。一番の難点はテーマ。地球史の音を感じるジオパーク。このテーマについてはガイドは全く理解できない。一方で、自然災害との共生がもたらす、豊穣の大地の物語になると、栗駒山麓の土石流、直下の地滑りというのは、いわゆる迫川の土砂供給の場。それが栗原平野の豊潤性をつくり、江戸時代、江戸の 3 分の１の米をまかなったくらいの米ができた。その米があるゆえに細倉鉱山の開発ができた。そして、長屋門という非常にぜいたくな門がたくさんある。このように災害と共生してきたという流れがよくできていた。よって、テーマについては少し変えるという点も合意してくれた。早急に議論するとのこと。

委員：テーマの音の話は取り下げるということで、手続きはこれからということか。

委員：手続きとしては単にテーマを変えるというのは困ると。協議会で議論して時間をかけて納得できるテーマにしていただきたいと伝えた。

委員：中心的な研究者の方が出した案には否定しにくいということもあったようで、このようなことは他のジオパークでもありがちだ。テーマが決められた経緯の説明はあったのか。

委員：学術的にバックアップしている宮城先生がこのテーマに非常にこだわっており、このテーマだとジオパークの地域の人たちもやりづらいのではないかということを率直に宮城先生に話した。わかりづらいと言ったら納得してくれた。事務局が言えないことを現地審査で指摘してもらえると通るようになるのでありがたいとのことだった。

顧問：荒砥沢の大規模地滑りがあったところは 3－4 メートルくらいの津波がおきている。ダム湖に入った地滑り量は２パーセントくらい。それでも 3 メートルの津波をおこしているという

のは国内の山間部にあるダム湖への警鐘ではないかと思う。ダム湖で津波がおきたのは日本で初めて。イタリアのバイオントダムと同じことを引き起こしてしまう可能性がある。その点は発信されているか。
委員：現地のガイドはしっかり説明はしていた。500 メートル四方くらいの大きな地滑り、200－300 メートル、20 分くらいで動いたと詳しく説明していた。なぜおきたか、模型をつくって体験させていた。ガイドはおさえているという印象。
顧問：橋が落ちているのだが、それが上流に流されていた。これは明らかに津波。それはジオサイトになっていないのだろうか。
委員長：橋は残っているか？
委員：なかったと思う。崩壊がまだあり、林野庁が立ち入り禁止にしているところ。ただし、全体像を見られるところに４か国語対応で解説板を設置していた。ただ難点は、地滑り箇所を背にして解説板を見なければならない。配置が不適切であることを指摘した。
顧問：荒砥沢は目玉のひとつだが、砂防関係で将来どうするのか何かプランは。
委員：林野庁の方によると、あまりにも規模が大きくて全体対策はできない。ちょっとした崩壊等の対策を今している。排水トンネルも作っている。そうすることで地滑りの動きを鎮静化させていきたいとのこと。
顧問：地滑りはいまでも動いているのか。
委員：相当鎮静化はしている。ほとんど大きくはでていない。すべり面の角度が緩やかで、世界的にもめずらしい。
委員：荒砥沢は今後防災教育で活用していくという方向なのか制限する形にするのか。
委員：現地の立ち入りは安全面から難しいが、周辺から全体は見られる。荒砥沢の今回の地滑りと同様の規模の古い地滑りは見られる。教育活動もやっている。
委員：林野庁との連携は？
委員：協議会に林野庁の方がいる。
委員：安全管理を含めて林野庁が認めた上級ガイドを養成して、そのツアーは行うという話をされていた。良い体制はできている。
委員：お隣の湯沢との連携交流は？
委員：意識的にやっているとのこと。
委員：具体的に連合とかにむけて動いているということは。
委員：そこまではまだ。ただ今回の審査の時も湯沢からきていた。
委員：観光面に関しては、栗駒を囲む地域、湯沢や一関との連携の協議会はすでにできており、写真コンクールを行ったり、観光プログラムをつくるなど、自治体同士の交流はできている。
委員：湯沢の審査の時は栗駒の人がきていたが、今回の審査の時は湯沢の人は来ていたか？
委員：オブザーバーで来ていた。歴史的にも太平洋側と日本海側をつなぐルートが栗駒の山麓部であり、昔の栗原と湯沢は文化的につながっていたのでおもしろい形のテーマができてくるのでは。
委員：国内の GP では湿地の価値についてはあまり強調しているところは少ない。伊豆沼はラムサール条約の登録地であるし、世界谷地など、良い素材を持っているが保全が弱い。そのへんの扱いはどうか。

委員：伊豆沼のほうはラムサール条約により保全は進んでいる。観光保全のためにつくられた公益法人もジオの協議会に入っている。観光センターに伊豆沼の生態系を展示してあるところにジオパークの展示も合わせて行っていた。
委員：養成ガイド 33 名ということだが、どのように広いジオツーリズムをカバーしているか。またもっと増やす方向か。
委員：ひとりのガイドで全部やるのは難しいので山岳部、平野部、丘陵部とに分担して説明している。経験もあり、レベルが高いガイドが多かった。今活動できるのは 30 人くらいで、観光協会とも連携している。
委員：マインパークはご覧になったか。そこのプランは何かあったか。
委員：なぜこれだけの大規模な鉱山の開発ができたかという理由に、迫川の氾濫の歴史、またそれと関連した穀倉地帯がリンクしたことを話されていた。
委員長：それでは認定する方向でよいか。宿題もあるということだが。

＜Mine 秋吉台について＞
委員：3 人で審査した。2 年前に落選したところ。2 年間再構築しての再挑戦。前回は、ジオストーリーができておらず、地域をささえる組織、サポート体制がなかった。それに対し、名称も変えて、ほとんどの部分を占めている秋吉台をメインにしてジオパークにしようとした。教科書にもでているカルスト台地、地下水、生物多様性、そこの生活文化、産業を含めてジオストーリーをつくっていくことをわかりやすく説明されている。誰にでもわかるようなストーリーに改善された。前回のわかりにくいストーリーから比べれば非常に改善された。赤と黒の部分も重要で、赤の部分の銅というは奈良の大仏に使用されたこと、黒の部分は石炭で炭田があるということを付け加えていた。前回のものも含みながら秋吉台を中心に行っている。ジオサイトの保全の面では地域住民がサポートしているのが見られた。ただし、一部の炭田が整備されていないという課題はある。もうひとつの問題は、秋吉台がマスツーリズムの対象であること。観光圧に対し、どのように保全されていくべきか。観光客の侵入や鍾乳石を拾うなどの観光圧や、鍾乳石にあてる照明が引き起こす苔等の問題をどうしたらいいか対策が必要。教育研究活動については、小中学校でジオパーク学習がすすんでおり、特に小学校社会科の副教材である郷土教材で M のマークが資料集のページについており、ジオサイトに関連する事項であるということを小学生が早くから理解できるようになっている。地形地質に絡めて生活や環境を説明するようになっている。地域教育については、各地域において大人たちが資源を探したり勉強会がさかんに行われているし、地域ガイドが行われている。ただし自分たちが勉強していることが科学的にどうかというところまで達していない。そこで科学的な根拠を得られるような体制を作るため山口大学が全面的に協力する包括的連携協定を結んでいる。管理運営体制については、地域住民の理解が深まるように専門員を 2 名事務局において地域を啓蒙したり連携したりして地域から盛り上がるようなジオパーク作りをしている。最後の、地域の持続可能な発展とジオツーリズム、ガイド養成については、美祢の宿題として、現地の盛り上がりを若い世代にどうつないでいくか持続性がこれからの課題。これについては小学生から郷土教育をすることで世代につなげていこうということもあり、地域の勉強会やガイドの養成講座も地域もまたいで連携できないか。また、拠点施設である秋吉台科学博物館とは別に、秋吉台の展望台

のところに廃墟となった土産物屋を市が買い取り、秋吉台ジオパークの情報をガイダンスし、全体が見られる、あるいはガイドの情報交換の場として変えていきたいとのこと。国際対応については、台湾野柳地質公園との交流を行っている。世界にあるカルスト地形のカルスト台地のジオパークとの交流も持ちたいとのこと。結論として、2年前から格段に良くなっているし、一から体制を変え、ストーリーを変えていることで評価できる。地域一体がジオパークを盛り上げている。足りない点もあるが、一定の水準ははるかに超えているので認定で良いと判断する。

委員：例のパン屋さんは最近だが、もともとポテンシャルがあり、もともとあったネットワークがジオパークと繋がるような活動をしてきた。２年前は良いところを隠していたのではないかという印象すらある。以前は大学との連携もなかった。もともと山口大学が秋吉台の研究をしており、連携はあったが、遠ざけていたとすら感じる。プレゼンのとおり、本当に変わった。柚洞さん(徳山大学)のサポートもあったかと思うが、もともと力があった。懸念事項として、石の販売のことがある。お店も意識しており、どうしたらいいかということを聞きたがっている。少なくとも外国産のものを売っていてはいけないという意識は持っている。鍾乳洞からではなく、採石場から持ってきているということを明確にしてはどうかとアドバイスをした。

　ただ、観光協会との連携がいまひとつ。拠点をつくることでやる気のあるガイドも活用できる。また、地元の宇部興産は「鉱業から工業へ」というのが創業の理念で、ジオパークの理念に通じるとして、協力できるところは協力していきたいとのこと。地質の博士号をもっている従業員もいるので、おもしろい連携ができる可能性がある。秋芳洞の観光は、市の直営事業で行っていたので１６億円の赤字が積み上がったそうだが、今の市長が契約職員への切り替えなどで赤字解消の目処を付けており、今後はジオパークの拠点施設なども含めてハードがつくれる財源があるという。現地では、ハードの投資だけを急がないで欲しいとお願いしておいた。

委員長：ラムサール条約との関係は？

委員：鍾乳洞の地下水の生物多様性の部分は資源保全がしっかり行われている。それとは別のところで観光圧がある。

委員：将来的には世界をめざすという意識なのか。高いレベルでやってもらっても。

委員：資源的にはポテンシャルがある。そうは思っていないようだ。長い計画で先をみていくという印象。

委員：同じ印象。日本でまず実力を蓄えてという意識が強かった。山口大学との連携で研究のアーカイブをきちんとつくりたいとのこと。秋吉台の研究価値がわかってくるだろうという長い目でみている。

顧問：ガイドの説明の中で、石灰岩は地球環境との関わりとして、地球に海が誕生したから本来大気中に増える CO2 を吸収してくれたなれの果てだという説明はなかったか。

委員：なかった。

委員：ガイドのレベルはまだまだ。その認識はある。今回は、事務局を教育委員会にして、足元からやりなおした段階。現場のガイドは学習意欲があるが、観光協会との連携のまずさもあって、ガイド教育や連携の枠組みが十分でない。

委員：２頁保全のところで質問。秋吉洞や秋吉台全体についての保全に関する広域かつ総合的計画等は今後の課題、とあるが、国定公園の計画があり、天然記念物になっており、保全の計

画は機能しているかどうかは別として、一応あることはある。ここではそれを前提にしているのか、それとも他にさらに何かを求めていることがあるのか。
委員：今までの保全の計画だけでは、採石場のものを売ってしまうことに対する自己認識が十分ではないので、ジオパークならではのステップまでもっていってほしいという議論をした。いまの保全のままでは、鍾乳洞のなかで変色がでてきていることとかは、まだ。保全のために照明を設置せずにヘッドライトで中に入るような鍾乳洞もあるというようなやり方とかところ、天然記念物だからというだけでなく、あえて見せる箇所、残す箇所としてもっと考えていけるのではないか。活用する地域と保全地域とやっていけばいいのではないかという議論があった。地域の人が参画して以前から保全に取り組んでいる地域でもある。
委員長：ジオパークの活動の中には地域振興ということがある。ジオパークの活動が理解された。もともと持っていたものを出してきた。
委員：ジオパークを通して顔が見える関係を作っていくことも期待される。
委員長：申請を認めるということでよろしいか。
全員承諾

＜三島村・鬼界カルデラ＞
委員：離島ということもあり、長めに 10 日はワンデークルーズで３つの島を概観した。11 日に鹿児島港から硫黄島に入り実際の候補地を見学した。１２日は竹島の予定だったが、悪天候のために実際は見学できずに鹿児島に戻った。７３００年前におきた破局噴火の堆積物がそのまま残っているという場所。そのような地層に限らず火山地域で火山性の多様な温泉があり、硫黄採掘にまつわる歴史、植物群落、竹、照葉樹の固有種が残っている。島によってそれぞれ個性がある非常にジオ的資源にあふれた場所。学術研究が継続的に行われている。地形、地質だけでなく歴史や硫黄、海洋、温泉のさまざまな学者が研究を行っている。それらの最先端の研究成果を専門員が地域の人に還元して、地域のすばらしさを若い人たちに伝えるという仕組みができている。若い人達が島のなかでジオパークをめざして定住人口を増やそうという取り組みが広がりつつある。課題としては、協議会によるアクションプランの策定が遅れている。村全体の総合計画策定が今年度にあたるということでその中にジオパークの活動を入れようという時期だが素地ができていない。ジオパークを地域創生に盛り込みたいがまだ具体的な青写真に描けていないとのこと。また、３島の足並みがそろっていない。硫黄島が活動としては先行していて他２島が遅れているように見える。それをどう解消していくか。当初、解説板は作らないということであったが、それはまずいということを指摘。保全に関して。自然環境の保全については、村が独自に決めた条約等で守られていたり、将来的に硫黄鉱山については文化財として保護するという準備がすすんでいる。ただ実際に法的保全がなされていないので地域の力で守る必要がある。教育研究活動については、研究者が多様な面で研究をしている。それが一般市民にも還元されているというしくみができつつあるのでここはすばらしい評価ができるが、実際のジオパークの教育活動は学校の総合の時間の中にジオパークを含め、専門員が出向いて講義をすると聞いたが内容についてはあまりクリアでない。鹿児島県内にいくつかジオパークがあるのでそれらのジオパークとの連携も将来図れるだろう。組織運営体制について。三島村村長が会長で協議会を作っておりそれぞれ村自身の方向性を決める人がすべて入っている

ので意思決定をする組織としては十分だが、人材が少ないので意思決定する人達と現場で動く人達との役割があまりきちんとしていない。組織体制については今後きちんとつくっていくとのこと。これは宿題。次に持続可能な発展とジオツーリズムについて。交通手段はほとんどフェリー三島。このため来訪者数が限定されることからツーリズムのモニタリングがしやすい。島内に入ったら歩くか、島の人の車で島の人の案内によってツーリズムをするというのが今までのやり方だった。マニアックな人が訪れるような島だったところに、お手軽にまわれるワンデージオクルーズというのをつくってとても好評である。ジオツーリズムとしてはきちんと成立しており、良い取り組みをしている。島に停泊する時間が 20 分くらいしかないのが難点。島ではワンデージオクルーズを目的とした島民がいろいろなグッズを販売するお店をつくるのだが滞在時間が長ければもっと買い物をしてゆっくりでき、お客の満足度をもっと上げることができる。また、実際にオーバーユースの可能性もあるとの指摘が公開プレゼンの際にあったが、確かに多くの客が来ればオーバーユースになる可能性がある。無理に受け入れ態勢を拡充するのではなくて、今のキャパシティーでプログラムを作り、行列ができるジオツアーを目指すという方向のほうがいいのではないか。ツーリズムとしては良いのだが、残念ながらパンフレット類が全く整備されていない。また、現場の解説板もないので必要。せめて港には総合案内板があったほうがよい。どこに行けばよいかわからないことを指摘してきた。国際対応について。特に世界を目指すということではないので、日本語だけでもいいかもしれないが、看板については外国語の併記が望ましい。特に硫黄島はジャンベというアフリカの太鼓の指導にギニアの人がきたという国際交流がある。三島村のジオもアフリカの人に伝えられるような取り組みをすべき。防災教育について。硫黄島はまだ噴火している。住民は、活火山の近くに住むリスクがあることを知っている。防災訓練も行われているが、ハザードマップは見せてもらえなかった。活火山の危険に関する情報発信をしていないので、指摘した。ジオ的資源のすばらしさ、研究が継続されていてその質が保証されている。さらに専門員が献身的な取り組みをしたことで、地域住民が多くジオパークに関わり始めている。全村あげてのボトムアップ的なジオパークが実現できるポテンシャルを持っている。ただし、プランニング、ハード・ソフトウェアの問題がある。ジオガイドは質の問題がある。それはこれから養成講座を設けることで解消されていくことだと思う。以上のことから、3 名の現地審査員の総意として認定してよいという結論になった。

委員：三島村の人口は 347 人。うち若い人 167 人くらい。高齢化率は 33 パーセントだが前年よりよくなっている。島に若い移住者が入ってきている。若い人材が参加できるジオパークになっている。ユニークな点は、離島のため、フェリーでしか行けない。最初の島まで片道約 3 時間。クルーズもそうだが、船内にジオの説明が掲示してある。この時間を利用して、船内で、ジオ、鬼界カルデラ、九州の火山フロントの解説、ジオパーク自体のいろいろな説明等を専門員のかたが旅行会社と協力して組み立てている。分かりやすく説明しており、3 時間の長い時間を利用しながらこういったツアーの組み立てが可能なのだと分かった。島の方たちはそろいの T シャツで迎えてくれ、日常的にも桜島錦江湾のジオパークの方たちとの交流がある。審査当日は阿蘇のジオパークのガイドも乗船しており他のジオパークとの連携も可能性がある。離島ということで、それぞれの島の特徴がある。硫黄島には民宿や観光のインフラを開発されたところに、鬼界カルデラの海底地形が説明できる装置、ジオラマなどがあり、一連の三島村の地質、

自然を学ぶ整備ができている。８月２５日に台風があり、黒島に大きな被害がでて復旧作業で今忙しい。離島ということでより整備が必要との意識が見えた。事業計画やデータ、推進体制の研究部会についても８月末に資料として送ってきた。島全体の期待をジオパークにかけているということであった。
委員：オーバーユースについてどうモニタリングするか。県のサポートは。
委員：県は冷たいが、補助はする。実際に非常に高い補助率で、ジオクルーズとか離島振興に予算をつけているとのこと。逆にそれくらいの関わりのほうがいいかも。もし、ジオパークになれば霧島、桜島錦江湾、３つめになるので、県としてはやらないわけではないというくらい。
委員：三島村からのデータによると、観光客数としては平成 25 年のデータで約 4700 人くらいが来島している。民宿は硫黄島が 5 軒で 3 島全体のキャパシティーは 12 軒の民宿で 233 人。昭和 47 年にヤマハがリゾートホテルを建ててすぐ閉めた。大規模な開発は今後ないだろう。民宿の人達も島の自然の良さを認識し、それを活かしたサービス、観光客との交流を希望しているので、島の良さを大事にしたジオパークでいける。
委員：ツーリズムに関しては、旅行協同組合が強力な体験プログラムを作っている。専門員と協力して島の自然を使ったツアーを作ってきた。三島村にとっては非常に大きな戦力で、ツーリズム的にはうまくやっていける。
委員：クルーズもいいが、地元に根ざすような宿泊型を目指すべきでは。上陸はするが、すぐ帰ってしまうのであれば、ジオパークとしてはあまり継続性があるように思えないが。
委員：硫黄島でとれる硫黄を使った花火を作る体験やシーカヤックは現地に宿泊しないと体験できない。滞在型のツアーはすでに始めている。ただ、花火をつくるだけでなく、そこで火山の話を伝えてほしいと思った。学術的説明をガイドから聞けなかったので 3 島の持つ特異性をもっと PR してほしいと思った。
委員：国が地方に求めている総合戦略策定計画では地方創生を掲げ、それぞれ地方は急いで作成しているのだが、それの中にジオパークはどのように位置づけられているかの説明はあったか。
委員：ない。
委員：今回のジオパークの構想に関しては、戦略プランの中には入れていきたいと考えてらっしゃる。戦略プランの目的は定住人口、交流人口を増やしていくことなので、ジオパークの活動自体をそれにかなうものという形で考えている。神奈川や北海道からも若い移住者が来ており、彼らが定住するための仕事を確保するためにもジオパークのプログラムをきちんと組み立てていくことが重要との認識を副村長も持っている。
委員：ワンデークルーズだけではなくていかに島の中に雇用をつくるかがジオパークの大事な役割では。
委員:今すぐできるのは、ワンデークルーズの滞在時間が20分しかないところを長くすること。そうすれば土産物屋でもっと買ってもらうこともできる。将来的には島にお金が入る方法をもっと考えたほうがよい。
委員：大手の業者が入っても一部の人は儲かるが島にはお金が入らないとか自然を守りたいとう人でコミュニティーがばらばらになってしまうことがある。自分たちのところにお金が落ちるしくみとしてのジオパークであるという認識を持てるかどうかが気になる。

委員：旅行業協同組合で旅行商品を作っていた方は三島村出身の方で島の状況を知っているのでオーバーユースのツアーは作らないと思う。島の現状をわかっている人が作っていけば共存できるプログラムを作れる。
委員長：宿題の中にも書いても良いような重要な点。
委員：名称のうち、中黒のポツをとったほうがいいのでは。三島村は鬼界カルデラの縁に乗っているので。
委員：黒島はカルデラから外れている。
委員：領域としては鬼界カルデラにみんな入っているのか。申請書では。
委員：申請している地域の範囲は 3 つの島と鬼界カルデラ全体を含めた地域、海域となっているので中黒で良いと思う。
委員長：それでは申請を認めるということにしたい。
内閣府：先ほど総合戦略のなかにジオパークが盛り込まれていないということがあったが、国の総合戦略にジオパークの文言は入っている。かつ、今年度日本再興戦略の 2015 改訂版には盛り込まれている。各地域からの計画や戦略に対してもジオパークが盛り込まれているところが多い。

委員長：以上で、日本の申請はすべて認めることにした。

―　休憩　―

プレスリリース文案につき修正。内容は各プレスリリースを参照のこと。
＜白山手取川＞
（全体の議論は省略。以下一部抜粋）
委員：‘シンショク’の‘シン’の漢字は学会ではにんべんで統一している。Erosion の意味。隆起に対応する言葉は侵食だが、山崩れは侵食作用には入らないので　削剥が適当。白山の地滑りがあるので。
顧問：隆起を削剥に結び付けるのは具合が悪い。隆起コンマ気候。国際的な価値をもつという説明。
＜Mine 秋吉台＞
(全体の議論は省略。以下一部抜粋)
Mine の斜体表記について
委員：Mine の斜体の扱いは。
委員:Mine をミネとマインをかけている。いろいろな意味があるから斜体にしているのだろう。
委員長：単に名称のフォントとして縦にしておくことにする。
＜栗駒山麓＞
（全体の議論は省略）
<三島村・鬼界カルデラ＞
（全体の議論は省略）

＜再認定審査方針について＞
事務局：資料７は、昨年までの再認定審査方針・手順について、5 月 23 日に幕張で行われた活性化部会・審査部会での意見によって修正されてもの。今年度はこれでよいか確認をお願いしたい。
委員長：修正案のポイントは。
委員：去年の再認定審査にあたって地元との認識のずれがないようにということで、廣瀬さんに、再認定審査に関わった方へアンケートしていただき、特に去年は宿題ペーパー、アクションプランがなかったので、その点をどう意識しているかを踏まえて作り直していただいた。再認定の場合だと現地でチェックすべきことが多いので最後の留意事項にあるように事務局とのやりとりを別途確保しておくというようなことを去年の反省を踏まえて書いていただいた。用意していただく資料も増やした。活性化部会のメーリングリストで経緯は流れていた。これまでと変える覚悟があるかなどは最近入れたことなので、今の再認定を受ける地域には通っていない。
委員：最初になる時に覚悟があって、変えていこうという意思で、再審査だから以前に聞いていなかったということだからか。
委員：今年、来年に関しては、認定審査の際に聞いていない地域となるので。言い出したのは２年前からか？２年後になったらこの部分は消える。こちらの出しているものが変わっているので、当然変えていかないと。同じではこまる。
委員：日本ジオパークの活動は発展しているので審査の具体的内容についてもやはり変化している。初期の段階で認定されたところは、その審査をうけずに認定されたところもある。ところが、再審査の時にそういう活動をしてきていませんでしたというところがあった。去年の伊豆大島がそうだった。そこで段階制を明確にしよう、再審査の留意事項をきちんとまとめようということになり、‘覚悟があるか’という言葉が今年は入った。
委員：来年以降の地域に対しても再認定方針については公開したほうが？
委員長：今日の議論は議事録として公開するか。
事務局長：公開する。再認定地域に送り、９月末には再認定審査の書類を提出してもらう。その後、現地審査。
委員長：全員が知っているという状態にする。日程は？
事務局長：前回の委員会で現地審査担当を決めていただいている。日程は、各地域で始めていただいている。最終的決定は本日以降になる。
委員：確認だが、書類がでてこない場合は？
事務局長：でてこない場合は再認定審査を辞退するということと思う。
委員：アクションプランはでているか。
事務局長：でていない。前回の委員会でアクションプランがでているか確認するとなっていたが、昨年の再認定の時にアクションプランを要求した 3 地域は対応してきている。
委員：いや、でている。白山手取川、茨城県北、下仁田、男鹿半島、秩父、磐梯山もでている。2011 年宿題(対応)ペーパーを持っている。メールでも流したと思う。ふくい勝山もでているのでは。
委員長：確認するように。

委員：宿題ペーパーに対するアクションプランが出されただけで議論はされていない。ワーキンググループで柴田さんと話をしたが、現地審査研究会ではアクションプランに対して JGC はコメントしなくてもいいのではないか､4 年後に使えばいいのではないかという話でとまっている。
委員長：それはそれでよいと思うが、もう一度委員に配付をお願いする。それでは報告事項と次回日程について。
事務局長：報告事項を 2 点。ユネスコの正式プログラムの件、各国ごとにユネスコ世界ジオパークに移行することに同意するサポートレターを総会前に提出するようにという依頼が GGN のほうから来ており、ユネスコ国内委員会のほうにお願いをしてこれを提出してもらうことになった。ユネスコ正式プログラム化に対して、日本ジオパークネットワークとしての対応は各地域において総会前後での PR 活動を展開する。もう 1 点は、白山で来年 2 月の予定であった全国研修会の際、ユネスコ正式プログラム化の記念フォーラムを予定している。当初 2 月を予定していたが、GGN のマッキーバ氏を招待することになり、1 月下旬で調整に入っている。
委員長：次回委員会は 12 月 14 日 13 時から。

（了）